

「宗尊親王論」 源実朝との比較を通して

本田 幸

序

宗尊親王は、鎌倉幕府の第六代將軍であり、歌人でもあった。鎌倉幕府念願の初めての皇族將軍として幼くして迎えられるが、傀儡でしかなかった。一五年間在職するが、二五歳の時に謀反の嫌疑をかけられて將軍を廃されて帰京し、その後、父法皇（後嵯峨）の崩御を機に出家する。出家の二年後、若くして没した。三三歳であった。

彼は第三代將軍であった源実朝が没してから二三年後にこの世に生を亨け、同じ土地で同じ地位にあり、同じく和歌を好んで詠み、同じく若くして没する。その生涯は実朝と相通じるものがあり、大変興味を引く。

また、彼は鎌倉時代の歌人としても名を残し、家集も四つあり、三〇〇首あまりの歌を後世に伝えているが、実朝ほど有名ではない。

そこで、本稿では、宗尊親王の生涯と和歌を見ていきな

がら、源実朝との共通点や比較も試みていくことにする。
尚、本稿記載の年齢は全て数え年であることを断っておく。

本論

第一章 幼將軍

第一節 生い立ち

親王は仁治三年（一二四二）一月二二日京都で後嵯峨天皇の第一皇子として誕生した。母は准三后平棟子（藏人木工頭棟基女）である。

親王は始め、後鳥羽院の寵愛が深かった承明門院（源在子）のもとで養われた。三歳の時に親王宣下があり、宗尊の名を賜った。その後、後高倉院の皇女式乾門院利子の猶子となった。門院は、おびただしい莊園を所有しており、

自分の死後は親王に全てを譲るつもりであったというから、親王がもしそのまま都で暮らしていたならば、豊かで平穩な生涯をおくる事ができたに違いない。

しかし、元服した建長四年（一二五二）の春、親王を征夷大將軍に迎えたい、との使者が鎌倉から上ってきた。

皇族から將軍を迎える事は幕府の久しい念願であった。

頼朝亡き後の鎌倉幕府にとっては、源氏に代わる事のできる最高の形式だったからである。北条政子は、子の無い実朝の生前から既にその考えを持っており、実朝夫人の甥にあたる人物（冷泉宮）が候補にあがっていたのだが、実朝の死後、宮の東下を要請したところ、後鳥羽院に反対されて破談になり、仕方なく摂家から、源氏の血縁にもあたる三寅（頼経）を將軍に迎えた、といういきさつがあった。

また、親王の父である後嵯峨院は、幕府の強い後押しによって即位した人であるから、幕府からの申し出を断るわけにはいかなかったはずである。

また、第一皇子とはいえ宗尊親王の母は木工頭の女、一方皇后は当時の実力者西園寺実氏（註1）の女（大宮院）であった。それゆえ、皇后に皇子が相次いで生まれた後は宗尊には皇位継承の望みが無くなり、後嵯峨院はわが子の幸せを考え、將軍として鎌倉へ出す事に決めた事が『増鏡』の文章（註2）からうかがえる。

そして親王は建長四年三月、一一歳で東下し、四月、鎌倉幕府第六代將軍の地位に就く事になった。「かゝる例はまだ待らぬ」『増鏡』皇族將軍の誕生である。

將軍といってもまだ幼子、幕府の敷いたレールの上を走るしかなかった。政治の実権は執権北条時頼たちにあり、しよせん親王は傀儡でしかなかったのである。

実朝が三代目の將軍になったのは建仁三年（一二〇三）、一二歳の時であった。以後、実朝は実母である北条政子や祖父時政・叔父義時らの敷いたレールの上を走る事になる。彼もまた、傀儡だったのである。

第二節 將軍になって

八幡宮参詣・的始・蹴鞠・流鏑馬などの恒例の行事の度に定められた役割を演じ、親王の生活は平穩に続いていた。

単調な暮らしの中、正嘉二年（一二五八）には翌年の上洛の事が決定され、親王を喜ばせたが、大暴風による諸国損亡を理由に上洛は延期されてしまう。

失望は大きかったはずである。この話は、実朝の渡宋計画失敗の話（『吾妻鏡』）を連想させる。建保四年（一二一六）、実朝二五歳の頃の話であるが、鎌倉に下向し、実朝への拜謁を求めた宋人陳和卿から、自分の前世が宋の帝王

山の長老であると聞いた実朝は、周圀の反対を押し切り、宋に渡る計画を立てて巨船を建造したが、進水当日に船が動かなかった為、計画は失敗に終わった。

異国人の言葉を信じ、自分の地位をも忘れて渡宋に夢馳せた実朝、本来なら京にあって皇族として豊かで平穩な暮らしを送れた身分でありながら、將軍となつて夢薄い毎日を過ごす中、京に上れる機会を失つた親王。二人とも將軍とはいえ傀儡にしかすぎない自分自身の中で、心理的に追いつめられたものがあつたに違いない。

その様な中、親王の暮らしに色どりが生じたのは文応元年（一二六〇）三月のこと。先に向下し、時頼の猶子になつていた近衛兼経の女、宰子との結婚である。親王は一九歳、宰子は二〇歳であつた。親王は、妻を迎え、今までの失望などを気分一新、新鮮な日々に希望を抱いたことだろう。

ともかくも、鎌倉での年月を重ねてゆくうち、親王は次第に自分自身の世界を築きあげる事に努めだす。選んだのは学問や和歌であつた。実朝にしてもそうである。次の章では二人がそれぞれ和歌の世界に引き込まれてゆく様を述べてみたい。

第二章 和歌への傾倒

第一節 和歌との出会い

さて、親王がいつから和歌を詠んでいたのかは資料が無いのでよくわからないが、『吾妻鏡』において、建長五年（一二五三）五月五日の条に

今日。於御所^三有^三和歌^三御會^三云々。

とあるのが親王の和歌関係の記事の最初であるから、この頃から和歌の世界に眼を向け始めたのだろうか。一二歳の時である。

建長六年一月一八日には河内守源親行を召して源氏物語の講義を聞いている（『吾妻鏡』より。以下の史実も同じ）。一三歳である。一五歳の康元元年の七月一七日には、山ノ内の時頼の最明寺に仏を拝礼に行き、音楽と和歌の会をしてその日は逗留した。その後文応元年（一二六〇）正月には、御所に昼番衆を設置した。歌道・蹴鞠・管弦・右筆など一芸に秀でた者を、順次祇候させる制度である。広く学問や遊芸を身につけようとする姿勢がうかがえるが、親王が特に関心を寄せたのは和歌である。

『吾妻鏡』における実朝の和歌関係の記事の初出は、元久二年（一二〇五）四月一二日の条であり、実朝一四歳の時である。前述の親王に関するその初出は一二歳の頃であつたから、二人ともだいたい同じ位の年頃に和歌を詠み

始めたと言えなくもないであろう。

第二節 作品紹介

それでは、次に二人の和歌について述べる前に、ここで今から取り上げていこうとする集について簡単に説明しておく事とする。

宗尊親王の伝存する家集としては、年代順に、『瓊玉和歌集』、『柳葉和歌集』、『中書王御詠』、『竹風和歌抄』がある。

また、今日伝来していないが、親王一二歳から一六歳の頃までの歌を収めた『初心愚草』がある。初学期の頃なので、初心であり愚草であるという謙遜の気持ちがあるがその書名からうかがえる。

『瓊玉和歌集』……文永元年（一二六四）一二月九日、親王の命により真観が撰進したもの。春上下・夏・秋上下・冬・恋上下・雑上下の一〇巻、五〇八首から成る。但し、三七八番の歌に別人のものが混入しているので、実際には親王の歌は五〇七首である。当時、真観は『統古今集』の撰者の一人だったこともあるが、本集所収歌のうち四八首が『統古今集』にみられる。また、『統古今集』で親王は、入集歌数で第一位を占めている。

『柳葉和歌集』……五卷五冊から成り、各年に一巻を宛て、

弘長元年（一二六一）から文永二年（一二六五）までの五年間の作、合計八五三首を収載している。しかも、各年約二〇〇から三〇〇首のうち、約一〇〇から二〇〇首を撰んで載せていることから、この時期だけでも相当活発な創作活動をしていた事がわかる。また、弘長元年には、歌仙結番の制（近習の中から和歌に堪能な者をえらび、順次当番を定めて一日五首の詠歌を提出させるという制度）が設けられている（『吾妻鏡』より）。和歌会を聞くことに熱中し、自らも多くの作品を詠じた時期であったといえる。

『柳葉和歌集』は文永三年（一二六六）の撰とされるが、この年は親王が鎌倉を追放される年である。しかし本集は、鎌倉を追放される七月以前の撰だと推測^{推測}しておく。

『中書王御詠』……文永四年（一二六七）の撰。文永二年（一二六五）春から文永四年秋頃までの和歌が収められている。文永三年、鎌倉を追放され、帰洛する前後の詠を含んでいる点が注目される。所収歌は三五八首だが、元来は三六〇首から成るものであったと思われる。また、親王は中務卿（中務省は唐の中書省にあたる）になった為、中書王とも呼ばれる。

『竹風和歌抄』……五卷。一〇二〇首収載。文永三年（一二六六）八月から文永九年（一二七二）一月までの詠で、親王晩年の家集として注目される。

その他

『東関竹園三百首』……三百首和歌・中務卿親王三百首・文応三百首・宗尊親王三百首などともいう。宗尊親王の定数歌。文応元年（一二六〇）一〇月以前の成立。一九歳の詠である。

『將軍宗尊親王家百五十番歌合』……弘長元年（一二六一）七月七日に宗尊親王家で催された歌合。春・夏・秋・冬・恋各二首一五〇番の歌合で、歌人は親王を含めて三〇人である。

次に、実朝の『金槐和歌集』について述べてみる事とする。

『金槐和歌集』……略して金槐集ともいう。鎌倉右大臣家集とも呼ばれる。一冊。定家所伝本は建暦三年（一二二二）実朝二二歳までの成立といわれる。六六三首。貞享版本（貞享四年）は以後の作をも含め、七一九首（そのうち三首は他人の歌）。

尚、本稿で次に扱う作品は、『新編国歌大観』第七巻私家集編Ⅲ・第十巻定数歌編Ⅱ歌合編Ⅱ補遺編（角川書店）、『金槐和歌集本文及び総索引』（笠間書院）によったものである。また、調査の対象は前に挙げた各々の作品集とし、それ以外の勅撰集などに所収されているものは都合上省いた。

第三節 作品比較

さて、二人の残した作品群から何か共通点やそれぞれの特徴が見つかるかどうか、まず集ごとに歌の主題を明記されているとおりに四季、恋、雑とに分けてその歌数を調べてみた（表一）。その際、『柳葉和歌集』と『竹風和歌抄』の中で分類に迷う不明な箇所があった場合、きちんと部立に分けられていないけれども各々の季節や恋の歌が幾つか固まって並べられていた箇所については部立別分類として扱い、四季の歌でも明らかに「雑」の部に入っているとわかる様なものや、部立の明記が無く、順不同に並んでいる四季の歌については「雑」の部に入れて扱う事にした。これは、ここでは和歌一首一首の検討が目的ではなく、大体の傾向を把握する事を目的とする為の便宜的な措置であることを断っておく。

表一を更に四季とその他に大きく分類したものが別表一であるが、これからわかる様に親王と実朝はそれぞれ四季を詠んだ歌が多く、親王の合計と『金槐集』のそのの全歌数における割合は、それぞれ半分以上を占めている。

特に夏と冬の歌が少なく、春と秋の歌が多い傾向が両者にみられる（表一）。そして、秋の歌が一番多い。秋といえば、感傷的になりやすい季節である。

その他	四季		
1486	1562	数	宗尊計
48.8	51.2	%	(3048)
311	352	数	金槐
46.9	53.1	%	(663)

別表1

※重出歌を含めた数値である。
 ※『金槐集』では「賀」「旅」という部立もあったので、ここに示す。

雑	恋	冬	秋	夏	春	部集	
99	89	47	129	48	95	数	瓊玉
19.5	17.6	9.3	25.4	9.5	18.7	%	(507)首中
224	125	81	175	78	170	数	柳葉
26.3	14.7	9.5	20.5	9.1	19.9	%	(853)
149	49	30	50	30	50	数	中書王
41.6	13.7	8.4	14	8.4	14	%	(358)
555	94	68	120	64	119	数	竹風
54.4	9.2	6.7	11.8	6.3	11.7	%	(1020)
30	70	30	70	30	70	数	東竹
10	23.3	10	23.3	10	23.3	%	(300)
	2	2	2	2	2	数	150番
	20	20	20	20	20	%	(10)
1057	429	258	546	252	506	数	合計
34.7	14.1	8.5	17.9	8.3	16.6	%	(3048)

雑	旅	恋	賀	冬	秋	夏	春		
128	24	141	18	78	120	38	116	数	金槐
19.3	3.6	21.3	2.7	11.8	18.1	5.7	17.5	%	(663)

表1

『瓊玉和歌集』に次の様な歌がある。

秋夕を

さびしさよながむる空のかはらずは都もかくや秋の夕暮

(秋歌上二〇〇)

和歌所にて

人はこで秋風さむき夕こそげにさびしさのかぎりなりけ

れ (秋歌下二五四)

これらの歌からは、文字通り親王の「さびしさ」や、孤独感が感じとれる。都から妻を迎えても、親と離れ、都から遠く離れた東へ下って来た寂しさは薄らぐことはなかったのか。『瓊玉和歌集』は親王が結婚してから四年目の冬に成ったものである。

それでは、結婚して間もない時に詠んだ秋の歌の中には「さびしさ」が詠まれているだろうか、結婚の翌年にあたる弘長元年(一二六一)の歌を収めた『柳葉和歌集』巻一の秋の部で調べてみると、一首だけあった。

さびしさはながめなれぬるかげとだにおもひなされぬ秋の夜の月 (秋三二)

都への恋しさは、紛れるところか、都から来た妻を見てますますつのつていったのではないだろうか。

以前に上洛の話がもち上がったが、中止になった事があった(第一章第二節)が、再度上洛の事が決定されたのが弘

長三年（一二六三）八月九日である。しかしまたもや中止となつてしまった。大風の為、大きな被害が出てしまったのである。

その時の歌に

弘長三年八月の風によりて、御京上とどまらせ給ひて後、をのこども題をさぐりて歌よみ侍りける次に、浦舟といふ事を

今ぞしる浦こぐ船の道ならぬ旅さへ風の心なりとは

（瓊玉 四三四）

御京上にとどまらせおはしましてのころ、よませたま

ひける

今更になれし都ぞしのぼるる又いつとだにたのみなければ

（瓊玉 四五五）

夢みる都へ本当に行けるのはいつか。その想いはつるばかりである。

歌中に見られる「都」の数を調べてみた。

都	集	
	数	瓊玉 (507)
16 3.2	数%	柳葉 (853)
9 1.1	数%	中書王 (358)
10 2.8	数%	竹風 (1020)
20 2.0	数%	東竹 (300)
5 1.7	数%	150番 (10)
0 0	数%	合計 (3048)
60 2.0	数%	金槐 (663)
6 0.9	数%	

※「宮こ」なども含む表2

親王の作品中には六〇首みられ、全歌数における割合としては『金槐集』よりも約一パーセント程多い。また、『金槐集』においては、六首中三首は「月のみやこ」として出ており、京の都ではない事を考えると、その数は三首に減るのである。

都への強い憧れから都の女性を妻に迎えた程の実朝であるが、「都」という詞を含んだ歌には王朝文化の地である都への賛美と思われるものは見あたらない。

春月

ながむればころもでかすむひさかたの月のみやこのはる

のよのそら（金槐 三五）

故郷惜花心を

さくなみやしがのみやこのはなざかりかぜよりさきにと

はましものを（金槐 八九）

それに対し、宗尊親王にとつての「都」は生まれ故郷であるから、文化の地としての憧憬と郷愁は重なり、おのずから「都」という詞には次に挙げる歌の様に、思慕の情がついてまわるのであらうと思われる。

和歌所にてをのこども結番歌読み侍りける次に
月みればあはれ都と忍ばれて猶ふる郷の秋ぞわすれぬ

（瓊玉二一九）

花月五十首に

忘れぬ都の秋をいくめぐりおなじ東の月にこふらん
 (瓊玉二二七)

思うままに言う事も振る舞う事もできない立場にあった
 青年將軍にとって、和歌の中の世界は自由に心に思う事を
 ぶちまける唯一の抛り所であったのかもしれない。

その、心に秘めた思いを「都」に託す他に、別の形で表
 出していないかを雑歌の中に捜してゆくと、「述懐」・
 「懐旧」などと題してあるものを見つかる事ができた。そ
 こで、親王の心情と関わると思われるものをまとめてみる
 と、別表二の結果を得た。

積教	賀(祝)	神祇	無常	懐旧	述懐		
						数%	瓊玉(507)
2 0.4	1 0.2	1 0.2	0 0	1 0.2	14 2.8	数%	瓊玉(507)
3 0.4	4 0.5	3 0.4	1 0.1	4 0.5	13 1.5	数%	柳葉(853)
2 0.6	0 0	14 3.9	2 0.6	15 4.2	27 7.5	数%	中書王(358)
4 0.4	7 0.7	3 0.3	5 0.5	10 1	14 1.4	数%	竹風(1020)
		な		し		数%	東竹(300)
		な		し		数%	150番(10)
11 0.4	12 0.4	21 0.7	8 0.3	30 1	68 2.2	数%	合計(3048)
4 0.6	18 2.7	6 0.9	2 0.3	0 0	1 0.2	数%	金槐(663)

※金槐の「賀」は雑中のものではないが、あえてここに入れた

別表2

親王に「述懐」即ち、心の思いを述べた歌が多いことが
 わかる。例を挙げると、

述懐の心を

後の世を思へばかなしいたづらに明けぬくれぬと月日か
 ぞへて (瓊玉 四八九)

述懐

身をうきになしはててこそ思ひしれ人のなさけはなき世
 なりけり (中書王二八八)

また『正徹物語』に「宗尊親王は四季の哥にも、良もす
 れば述懐を詠み給ひしを難に申しける也」とあることを考
 えると、四季の歌を好んで多く詠んだ親王であるから、四
 季の部立の中にも「述懐」が多く含まれているならば、全
 体的にみると「述懐」の数は更に増えるであろう事が想像
 される。

また、実朝に「述懐」が少ないのは意外であった。題と
 して明記してあるもののみの数である事で、こういう結果
 になったのであろうとも考えられるが、大西民子が「早熟
 な悲劇の詩人実朝」の中で、

「藻塩やく海士のたく火のほのかにもわが思ふ人を見るよ
 しもがな

久方の天の川原にすむたづも心にもあらぬねをや鳴くら
 む」

という歌を詠んだ実朝に対し、

藹たけた公家の姫君を妻とした実朝が、たとえ架空の恋としてもなおこのように歌わなければならなかったということは、境遇の如何にかかわらず、所詮この世で果たし得ない夢を次々に描いては追い求める詩人であったことを示すのではなからうか。

と言っている様に、親王の親に心情を吐露するよりは、空想の世界にひたる方であったのだろうとも考えられる。

また、「懐旧」が親王の方には多くあり、『金槐集』には無いのは、二人の境遇に関して大きく違っている点がただ一つあるからであると思う。それは、親王には「昔」があった、実朝には無いという事である。つまり、京で育った幸せな日々を持ち、また、まがいなりにも東の頭領、将軍であった頃を経て失脚した後、余生を送りながら昔を懐かしんだ時間があつた親王に対して、暗殺という悲劇により、ふつりと將軍のまま命を終えた為、昔をしのぶ時間が与えられなかった実朝の違いにあるのではないかと私は分析する。

「昔」の数の統計をとってみた(表三)ところ、割合でみると両者の数値にはあまり大差がなかったが、一首一首の内容を見てゆくと両者の間に共通点と相違点を発見できた。

昔	集	
	9 1.8	数%
18 2.1	数%	柳葉 (853)
28 7.8	数%	中書王 (358)
72 7.1	数%	竹風 (1020)
4 1.3	数%	東竹 (300)
1 10	数%	150番 (10)
132 4.3	数%	合計 (3048)
24 3.6	数%	金槐 (663)

※「いにしへ」「こしかた」も含む
表 3

次の例からは、『金槐集』の中の「昔」と、親王が若い頃の「懐旧」の作品中の「昔」は、同じく、恋や、ただ漠然と昔をしのんでいる事がわかる。

たてまつらせ給ひし百首に、懐旧

和歌のうらやあはれむかしへありきてふ人のなさを猶

忍びつつ (瓊玉 四五八)

懐旧

なき人をあらましかばとおもふにもただ恋しきはむかし

なりけり (柳葉 三五二)

こひのうた

名にしおはゞその神山のあふひぐさかけてむかしを思い

でなむ (金槐 四九四)

鶯

ふかくさのたにのうぐひす春ごとにあはれむかしとねを

のみぞなく (金槐 五三九)

しかし、次に挙げる親王の例からは、鎌倉追放後の歌も

含むとされる『中書王御詠』のあたりから、今の自分の境遇をはかなむがゆえに、平穩であつた昔の頃を懐かしんでいると思われる詠が現われる事がわかる。

懐旧

むかしとしてしのぶばかりになりけりみしもききしも昨日とおもふに（中書王三一五）

何と又むかしをさへはしのぶらん身のうきばかりおもふべきよに（中書王三一七）

わすられぬむかしをそでにさそひきてねざめにあまる我が涙かな（中書王三二一）

懐旧

分きてそのなに事としはなけれどもただむかしこそ恋しかりけれ（竹風 四八五）

雑懐旧

大かたのならひよりけに恋しきはあはれわがみのむかしなりけり（竹風 五八七）

第三章 晩年

たてまつらせ給ひし百首に、月を

あづまにて十年の秋はながめきぬいつか都の月をみるべき（瓊玉 二一八）

あれ程想いを寄せていた故郷に帰れる機会が、ふいに訪

れた。しかも、謀反人の汚名を着せられて送還される形で願いが叶うとは、一体誰が想像し得たろうか。親王にとつては一四年ぶりに帰ってきた懐かしい故郷であつたが、親王を迎えた京と冷たかつた。

都

またれこし都はおなじみやこにてわが身ぞあらぬわが身なりける（竹風 一〇五）

そして意外にも

あづまのふるさを思ひやりて

ふるさとおもひやるこそあはれなれうづらなくのとなりやしぬらむ（中書王二五三）

と、鎌倉を「ふるさと」と呼んでいる歌がある。親王は、今や京にも鎌倉にも居場所を失い、名ばかりとはいへ、將軍とうやまわれて暮らした鎌倉での日々が懐かしく思われたいようである。

里

今は身のよそに聞くこそあはれなれむかしはあるじ鎌倉の里（竹風 一〇六）

雑里

十年あまり五年までにすみなれて猶わすられぬ鎌倉の里（竹風 五五五）

落ちぶれた我が身を鼠に例えた歌がある。

鼠

とらとのみもちゐられしは昔にて今はねずみのあなうよ
の中 (竹風 二四六)

後嵯峨院が崩御した年に親王は出家し、二年後、その短
い生涯を閉じた。三三歳であった。

実朝が前將軍頼家の遺子公暁の凶刃にたおれたのは二八
歳である。

結び

「和歌に打ち込んだ薄幸な鎌倉將軍歌人」^(注4)として源実朝
と比較しながら宗尊親王の生涯と和歌を見てきた。その結
果、二人の生き方には共通点があるものの、宗尊親王には
親王獨特の一面がある事がわかった。

実朝にとって、彼を生み育てた鎌倉は安住の地ではなかつ
たとしても、そこは彼の存在を必要とし、暖かく育んでく
れていた故郷であったが、宗尊親王の場合は、思慕し続け
た生まれ故郷である京都に戻ると同時に、故郷を喪失して
しまったのである。〈謀反を企てて罷免された將軍〉とい
う汚名を着て帰ってきた自分に用意されていたものは、た
だ生命果てるまで住む事を許された仮の宿りであった。一
一歳まで過ごしたかつての暖かな安らぎの地は、もうどこ
にも見えない出す事は出来なかつたのである。第二章で見たよ

うに、親王の晩年の詠には「昔」を懐古するものが多かつ
た事は印象深い。彼にとつては、気の許せない他人の中で
傀儡として暮らした鎌倉での日々が却って忘れられない思
い出と変わったのは皮肉であった。

和歌に託して心情を詠み込むのが親王の特色であり、彼
の残した作品群の中から、今私達は当時の彼の心中を想像
する事ができる。

実朝は、右大臣拝賀の式で雪を血で染めた最期のその悲
劇性により、後世の人々の心にその名を刻み付けたが、初
代の皇族將軍としてその数奇な運命を和歌と共に生きた、
宗尊親王という一人の孤独な歌よみを記憶にとどめている
人は希である。

〈注〉

注1 太政大臣西園寺公経の子。公経は四代將軍頼経の外
祖父。

注2 『増鏡』内野の雪

注3 『私家集大成 和歌史研究会編』第四卷中世II明治
書院昭和五〇年一月解題より。

注4 樋口芳麻呂「廃將軍の悲歌下」『短歌』昭和五五年
一〇月

〈参考文献〉

・『和歌大辞典』 明治書院 昭和六一年三月

・『国史大辞典』 吉川弘文館

・『歴史と旅特別増刊号39鎌倉・室町將軍家総覧』鈴木亨編 秋田書店 平成元年一月

・『日本の歴史』第九巻 鎌倉幕府 大山喬平著 小学館 昭和四九年八月

・新訂増補國史大系 第三十二巻『吾妻鏡 前篇』 吉川弘文館 昭和三九年七月

〃 三十三巻『 〃 後篇』 〃

四〇年二月

・大西民子「早熟な悲劇の詩人―実朝」『短歌』昭和三七年

・樋口芳麻呂「宗尊親王初学期の和歌―東撰和歌六帖所載歌を中心に―」『国語国文学報』第二十二集 昭和四三年三月

・山岸徳平「宗尊親王と其の和歌」『国語と国文学』昭和二二年一二月

・石田吉貞「鎌倉文學圈」『国語と国文学』昭和二九年一〇月

・樋口芳麻呂「政治家源実朝の歌人形成はいかに行われたか」『国文学 解釈と教材の研究』昭和五六年六月

・樋口芳麻呂「源実朝と和歌」『国語と国文学』昭和四八年四月

・片野達郎「治者と詩心―実朝」『国文学 解釈と教材の研究』昭和五一年九月

・樋口芳麻呂「魔將軍の悲歌（上）（下）」『短歌』昭和五五年九・一〇月

・樋口芳麻呂「宗尊親王の和歌―文永三年後半期の和歌を中心に―」『文学』昭和四三年六月